

⑦11月17日（月）衣食住、特に「飲食」の中國化

A 菜食主義 Vegetarianism

（一） インド初期佛教から繼續する佛教徒の食生活

不殺生戒を遵守 生＝生物＝眾生（＝有情 sattva）

佛教の眾生觀 眾生＝解脫しない限り輪廻轉生する生物
5種（五道輪廻） or 6種（六道輪廻）

☆ 植物に轉生することはない

⇒ 植物を食べるのは殺生行為でない（ジャイナ教と相違）
肉、鳥、魚、甲殻類、貝類を食べるのは殺生行為である

(二) 傳統佛教 ("小乘佛教" "聲聞佛教") の食生活

不食「三種不淨肉」

私に布施する目的で故意に殺したのを目撃した肉、
私に布施する目的で故意に殺したと聞いた肉、
上記二種の疑いがある肉

(問) 在家信者が市場で買った肉・魚を私に布施する場合、
その肉・魚を受け取って食べてもよいか？

(参考) 釋迦牟尼の直接的死因は食中毒であった。
その食中毒を誘引した食物 "sūkaramaddava" は
猪肉であったと推定する研究者もいる。

(三) インド中期大乘の如來藏説に基づく食生活

如來藏説「一切眾生悉有佛性」 (全ての眾生はブツダの性質を持つ)

⇒ 殺眾生＝殺佛

⇒ いかなる眾生も食べてはいけない (徹底的不殺生)

南朝宋 (劉宋) 求那跋陀羅 (Guṇabhadra; 394-468) 譯『央掘魔羅經』卷四 (T2, 540c) :

一切眾生無始生死生生輪轉，無非父母兄弟姊妹，猶如伎兒變易無常。自肉他肉則是一肉，是故諸佛悉不食肉。

一切の眾生は、いつ始まったかもわからない長期間、生まれ変わり〔その間に一度は必ず我が〕父母、兄妹、姉妹となっている。それはちょうど演劇の踊り子が色々な役に身を變え續けるのと同じである。我身と他身は同じ肉體である。それ故、諸佛は、〔自らと同じく將來必ず佛となるに違いない諸眾生の〕肉を決して食べないのである。

B 五辛＝五葷＝五葷辛

☆ 確たる漢譯經典も「五辛」に触れるが、五種とは何かを決して明記しない

南朝宋 沮渠京聲 (?-430/440-?) 譯『治禪病祕要法』卷二 (T15, 338b) : 若令彼神疾來者, 當淨澡浴、不食五辛、不飲酒、不噉肉, 於靜寂處一心數息、稱彼神名、念彼神像。

南朝宋 求那跋摩 (Guṇavarman; 367-431) 譯『菩薩善戒經』卷七 (T30, 996b-c) : 菩薩摩訶薩為破眾生種種惡故, 受持神呪讀誦通利利益眾生, 為呪術故受持五法。一者、不食肉、二者、不飲酒。三者、不食五辛。四者、不婬。五者、不淨之家不在中食。菩薩具足如是五法, 能大利益無量眾生, 諸惡鬼神諸毒、諸病無不能治。

☆ 「五辛」の五種を列挙する最初の經典は偽經『梵網經』(450-480 頃)である

☆ 偽經『梵網經』(T24, 1005b) : 不得食五辛, [1]大蒜、[2]革葱、[3]慈葱、[4]蘭葱、[5]興渠, 是五種, 一切食中不得食。

偽經(約 500-600 頃)『五辛經』(敦煌寫本) :

自今以後, 不聽比丘等食諸不淨五辛臭穢。

『梵網經』 [1]大蒜、[2]革葱、[3]慈葱、[4]蘭葱、[5]興渠は何か？

[1]大蒜 = garlic (蒜) である。これは確實で問題ない

[2]革葱 [3]慈葱 [4] 蘭葱 = 三種の葱である

しかし正確な同定は困難である 『梵網經』 漢語注釋の解説は諸説相違する
→ 今もある葱と韭/韭と辣韭/薤か、葱と韭と太葱 (*Eng. leek, Ger. Porree*) か

[5]興渠 = ヒング *Skt. hingu, Hindi hing* である

中國では興渠＝阿魏 = **asafetida = asafoetida**

Cf. CHEN Ming 陳明, (Trans.) Michael CAVAYERO, "The Sinicization of a Foreign Word in the Medieval Period: Taking *awei* 阿魏 (Asafoetida) as an Example. In Charles DiSimone & Nicholas Witkowski (eds.), *Buddhakṣetrapariśodhana: A Festschrift for Paul Harrison*, Indica et Tibetica 63, Marburg, 2024, pp. 65-122.

[5]興渠 xīngqú = 興渠 xīngqú = 形具 xíngjù = *Skt. hiṅgu* (= 阿魏 āwèi)

隋 智顗說、唐 灌頂記『菩薩戒義疏』卷下 (T40, 575a) :

舊云, 五辛謂蒜 (suàn)、葱 (cōng)、興渠 (xīngqú)、韭 (jiǔ)、薤 (xiè) 。

此文止蘭葱, 足以為五 (= 蒜suàn、葱cōng、興渠xīngqú、韭薤(jiǔxiè)、蘭葱(láncōng)) 。

『兼名苑』分別五辛。大蒜是葫荽, 茗葱是薤, 慈葱是葱, 蘭葱是小蒜, 興渠是蔥蒨。生熟皆臭, 悉斷。

段成式『酉陽雜俎』卷一八 (約860頃) :

阿魏, 出伽闍那國, 即北天竺也。伽闍那呼為形虞。亦出波斯國, 波斯國呼為阿虞截。樹長八九丈, 皮色青黃。三月生葉, 葉似鼠耳, 無花、實。斷其枝, 汁出如飴, 久乃堅凝, 名阿魏。

阿魏。ガズナ (Ghazna 伽闍那國) 即ち、北インド (北天竺) で産出する。ガズナでは「形虞」と呼ぶ。ペルシア (波斯國) でも産出する。ペルシアでは「阿虞截」と呼ぶ。樹の長さは八、九尺であり、皮の色は、青黄である。三月に葉が生える。葉は、鼠の耳に似ている。花と實はない。その枝を切断すると、汁が飴のように出る。しばらくして、堅く凝固する。阿魏と名づける。

菜食者 a variety of vegetarians vs. non-vegetarian

	果實	根菜以外野菜	五辛	乳・奶油・起司	蛋	魚	雞	其他肉
① Frutarian	○							
② Jain vegetarian	○	○						
③ Vegan	○	○	○					
④ Oriental vegetarian	○	○		○				
⑤ Lacto-vegetarian	○	○	○	○				
⑥ Ovo-vegetarian	○	○	○		○			
⑦ Lacto-ovo-vegetarian = Ovo-lacto-vegetarian	○	○	○	○	○			
⑧ Pescetarian	○	○	○			○		
⑨ Pollotarian	○	○	○	○	△		○	
⑩ Semi-Vegetarian = Flexitarian	○	○	○		△	△		
Non-vegetarian	○	○	○	○	○	○	○	○

(2.2) **assafoetida=asafetida, Sanskrit "hing," Modern Hindi "hing"**
 from Wikipedia (<https://en.wikipedia.org/wiki/Asafoetida>)

興渠 = 形具 = **hingū** (Hindi **hing**) = Eng. **asafetida**

Asafetida ([/æsoʻfetiðə/](#); also spelled **asafoetida**) is the dried [latex](#) ([gum oleoresin](#)) exuded from the [rhizome](#) or [tap root](#) of several species of *Ferula*, [perennial herbs](#) of the [carrot family](#). It is produced in [Iran](#), [Afghanistan](#), [India](#), [Central Asia](#) and [Northwest China](#) ([Xinjiang](#)). Different regions have different botanical sources. **Asafoetida** has a [pungent smell](#), as reflected in its name, lending it the [common name](#) of "stinking gum". The odour dissipates upon cooking; in cooked dishes, it delivers a smooth flavour reminiscent of [leeks](#) or other [onion](#) relatives. Asafoetida is also known colloquially as "devil's dung" in English (and similar expressions in many other languages).



Sanskrit "hingu" and its equivalents in different languages

Language	Name	Literal meaning/Notes
Bengali	<i>hin</i> (হিং)	
Chinese	<i>xīngqú</i> (興渠)	Also called <i>xíngjù</i> 形具 and <i>āwèi</i> 阿魏
English	Devil's dung	
French	<i>merde du Diable</i>	(meaning "Devil shit")
German	<i>Teufelsdreck</i>	(meaning "Devil's dirt")
Gujarati	<i>hīng</i> (હિંગ)	
Hindi	<i>hīng</i> (हींग)	
Marathi	<i>hinga</i> (हिंग)	
Nepali	<i>hing</i> (हिङ)	
Odia	<i>hengu</i> (ହେଙ୍ଗୁ)	
Punjabi	<i>hing</i> (ਹਿੰਗ)	
Sanskrit	<i>hīngú</i> (हिङ्गु)	From Proto-Iranian <i>Hángwr̥</i> "extract" or "resin"

Hing powder (i.e., *xīngqú* 興渠) is easily available in markets and online stores



Skt. **hingu** → 音譯「興渠・形具（=阿魏）」

→ 現代的解釋「洋葱 onion」



C 「五辛」を忌避する理由

1 インド佛教に基づく正統理由：惡臭 bad smell/stench

1.1 北涼 曇無讖譯『大般涅槃經』（Tr. 421 AD）：

不食肉，不飲酒。五辛能葷，悉不食之。是故其身無有臭處，常爲諸天一切世人恭敬供養尊重讚歎。（T12, 432c-433a）

1.2 北魏 曇摩流支（Dharmaruci）譯『入楞伽經』（tr. 510s/520s AD）：

酒、肉、葱、韭、蒜、薤臭味，悉捨不食。（T16, 562b）

1.3 偽經『五辛經』（composed in China during 500s AD）：

自今以後，不聽比丘等食諸不淨五辛臭穢。（敦煌写本）

⇒ 日々、菩薩の活動を實踐する時、體臭や口臭が強いと、誰も聽法せず、逃げ去る

⇒ 菩薩活動の大前提として、毎日いつも必ず體を清潔、清淨を保ちなさい！

2 後に考案された、偽の中國的理由付け（偽經に基づく）

中國偽經（mid Tang dynasty）『首楞嚴經』（正名：『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』；成書8-9世紀頃？；T19, 141c）：

阿難，一切衆生食甘故生，食毒故死。是諸衆生求三摩提，當斷世間五種辛菜。是五種辛，熟食發姪，生啖增恚。如是世界食辛之人，縱能宣說十二部經，[1] 十方天仙嫌其臭穢，咸皆遠離。[2] 諸餓鬼等，因彼食次，舐其唇吻，常與鬼住，福德日銷，長無利益。[3] 是食辛人修三摩地，菩薩、天仙、十方善神不來守護，[4] 大力魔王得其方便，現作佛身，來爲說法，非毀禁戒，讚姪怒癡。命終自爲魔王眷屬，受魔福盡，墮無間獄。阿難，修菩提者，永斷五辛。

「熟食發姪，生啖增恚」：〔五辛を〕加熱して食べると色慾を發し、〔加熱せず〕生のまま食べると瞋恚（怒り）を増やす。〕 → 神に嫌われ、鬼に好かれる → 禁止

上記偽經『首楞嚴經』の説「熟食發姪，生啖增恚」は、その後、繰り返し引用され、この「偽經説」が中國で優勢、主流の理解となった

北宋 道誠『釋氏要覽』卷二（compiled in 1019 AD; T54, 281b）：

『楞伽經』（⇒『楞嚴經』）云，「是五種辛，熟食發姪，生食增恚。如是世界食辛之人能宣十二部經，[1]十方天人嫌其臭穢，咸遂遠離。[2] 諸餓鬼等，因彼食次，舐其唇吻，常與鬼住，福得日消，長無利益。」

北宋 元照（1048～1116）『四分律行事鈔資持記』卷三（T40, 378b）：

『梵網』云，「一切食中不得食」。『楞嚴』云，「熟食發姪，生啖增恚，如是世界食辛之人，縱能宣說十二部經，[1]十方天仙嫌其臭穢，咸皆遠離。[2] 諸餓鬼等，因彼食次，舐其脣吻，常與鬼住，福德日消，長無利益」等。

【参考 1】 現代日本の状況：辭書の誤り（紫字）

- 『**広辭苑**』 ご-くん【五葷】 [本草綱目〈菜部〉] 臭みのある五種の蔬菜。佛家の大蒜にんにく・茗葱らっきょう・慈葱ねぎ・蘭葱ひる・ **興渠にら**。…。五辛ごしん。
- 『日本國語大辭典』 ご-しん【五辛】 《名》 佛語。五種の、辛味や臭みのある野菜。忍辱(にんにく)、葱(ねぎ)、韭(にら)、淺葱(あさつき)、辣韭(らっきょう)などの五種をいう。**佛教では、色欲や怒りの心などが刺激され助長されるとして、僧尼がこれらを食べることを禁じた。五葷(ごくん)。**
- 中村元『廣說佛教語大辭典』 ごしん【五辛】 臭味の激しい五種の野菜。韭にら・葱ねぎ・蒜にんにく・薤らっきょう・**薑はじかみ（生姜・山椒）**の五菜。佛教ではその臭気のため、または**精力のもととして**これをきらう。

【参考2】 現代日本の現状：NHK View

(<https://textview.jp/post/cooking/18273>)

曹洞宗八屋山普門寺 副住職の吉村昇洋（よしむら・しょうよう）さんと、浄土真宗東本願寺派緑泉寺住職の青江覚峰（あおえ・かくほう）さんの話

1つは、五葷（ごくん）と呼ばれるネギ科ネギ属などの野菜。もう1つは、肉、魚介類、卵などの動物性の食材です。五葷はいわゆる精のつく野菜。性欲を刺激するものは佛道修行に必要なため、とりません。また、これらの食材のきついにおいも、修行の妨げになります。

何を五葷とするかは、時代や地域によって異なります。例えば現在の曹洞宗永平寺（＝日本禪宗曹洞宗大本山）の決まりでは、にんにく、ねぎ、にら、玉ねぎ、らっきょうが五葷です。古くは薑はじかみ（山椒〈さんしょう＝花椒〉や生姜＝gingerの古語）が含まれる場合もありましたが、これらは現在の永平寺では使われています。また、国や地域によってはパクチー（＝香菜）が禁止されていることも。いつでもどこでも必ず含まれるのは、にんにくです。

【參考 3】

日本佛寺

「不許葷酒入山門」

無標點の一文をどのように読むか？

正釋

「不許葷酒入山門」

= 「不許 《葷酒入山門》 」

俗釋 1 「不許，葷酒入山門」

= 「雖不許，而葷酒入山門」

俗釋 2 「不許葷，而酒入山門！」

= 「不許葷，然而酒入山門」

